

# 木工芸 - 村山 明のわざ -

日本人は、木の魂とともに生活してきた。

木を削りぬいた「くりもの刳物」は、

最も古い木工品である。

ここに、豊かな発想と熟練のわざによって

刳物の造形に挑戦し続ける工芸作家がいる。

平成十五年、国の重要無形文化財「木工芸」の保持者に

認定された、いわゆる人間国宝・村山明である。



けやきふぎうるしりん か もり き  
檜拭漆輪華盛器 (平成25年)



## ● 木取り

けやき  
檜は、材質が堅く強靱で、何より木目が美しい。  
「くりもの刳物」の構想には、こう作りたいという強い思いがなければならぬ。心に浮かんだのは、花の形。



## ● 墨付け

放射状に16等分し、その形の一枚を型紙とし、8枚の花弁を持つ花形の盛器を作る。縁の厚みと側面、それに底の広さ、これを型紙で描き込んでいく墨付け。



## ● 荒彫り

ハンマーで丸鑿まるのみを叩き込む。  
村山の頭の中には、完成した器の形状が、既に描き出されているのだ。彫り進める中で、形を手直しするとヌエのような姿になると村山は言う。



## ● 底ざらいと見込みの意匠

豆鉋まめがんなで底をさらい、突鑿つきのみで底までの高さを均一にしていく。再び、型紙を取り出し、見込みに稜線の位置を描く。正確に8等分の割り付けをしながら、線の仕上げはフリーハンドで。



## ● 意匠割り

見込みの曲線から側面の稜線へ流れを連続させる。小刀が、際きわを切り出す。細く深く彫るときは、鑿こてのみを使う。



## ● 裏面の彫り

ハンマーは、微妙にその位置を変え、ノミの同じ場所を叩かない。その動きで刃先をコントロールしている。  
手で触った感触が大事だという。機械の正確さではなく、人間の目と、手で感じたもの、それが、人が使う品物を作る時には欠かせない。



## ● 側面と縁の造形

伝統的な輪花形の意匠を基本に、そこに村山が工夫してきた稜線を加える。見込みから縁に至る斜面をつなげるように。

内と外の二つの世界を結ぶ上縁、ここに向かって伸びる稜線が、広がりを生み出す。



## ● きうるし 生漆のステズリ

①生漆を刷毛でまんべんなくのせていくステズリ。次に、②檜ひのきのへらを使って木地に漆を摺り込む。③水を打った室むろに一晩入れる。漆は、一定の温度と湿度の中で化学変化を起こし、硬く締まっていく。



## ● さびうるし 水研ぎと錆漆の目止め

目の粗い180番から、非常に細かい500番までの耐水性の紙やすりを使って水研ぎをする。京都特産の砥石を粉にした砥の粉を生漆に混ぜた錆漆。その錆漆で木目の細かいところまで、目止めする。



## ● 水研ぎ

やや目の細かい320番の紙やすりによる水研ぎ。稜線の左右を根気よく削り、滑らかな曲面にしていく。切れそうなほどシャープな稜線を、柔らかく、ぬくもりのある美しいラインへと変えていく。



## ● ふきうるし 拭漆

生漆を刷毛で摺り込んで木綿の布で拭き、半日ほど乾かした後、目の細かい500番の紙やすりで水研ぎ。2時間ほどおいて生漆を摺り込む。布で拭き、半日、室むろに入れる。仕上げの炭粉研ぎの後、さらに生漆を3回塗り重ねては拭き、炭粉で研ぐ。



## ● 完成作品

「けやき ふきうるし りん か もり き 櫻拭漆輪華盛器」。日本の大地で生き抜いてきた櫻は今、伝統のわざによって生まれ変わった。



## 村山 明 (むらやま あきら)

- 昭和19年 兵庫県尼崎市生まれ
- 昭和41年 京都市立美術大学（現 京都市立芸術大学）卒業、  
黒田辰秋に師事する
- 昭和45年 第17回日本伝統工芸展で「櫻拭漆文庫」が朝日新聞社賞受賞
- 平成元年 ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に  
「櫻拭漆盤」が収蔵される
- 平成15年 重要無形文化財「木工芸」保持者に認定される
- 平成17年 紫綬褒章受章

「木と言うものは人間よりずっと長いこと、  
四百年も五百年も生育しているわけやろ。  
で、人間はそれを、自分の勝手に切っているわけやろ。  
金がほしかったり、道の邪魔になったり、  
だけど、やっぱり、木というものの、もし、  
命というものがあるとしたら、やはり、まっとう  
させてあげたいなという気持ちがあるな。」

- 協 力 静岡市立登呂博物館 京都国立近代美術館 京都府京都文化博物館 東京国立近代美術館工芸館  
岐阜県銘木協同組合 龍臺寺 JEOL 日本電子株式会社 株式会社カジウラ 有限会社アツタ製材
- スタッフ 製作：佐藤哲夫 / 佐野文男 監督：有泉 寧 撮影：大木大介 照明：古屋熱 撮影助手：鈴木一朗  
製作進行：船津奈緒子 ナレーター：上杉祥三 音楽：山崎茂之 ネガ編集：幸地甫之  
タイミング：飯野浩 録音・効果：門倉徹 現像：IMAGICA 録音：東京テレビセンター